

## 近世都市における「遊民」の諸相

——下級宗教者・大道芸・門付け・物売り・職人——

山路興造

### 論文要旨

江戸時代社会の支配イデオロギーの用語として、しばしば使用される「土農工商」は、総称して「四民」とも称されたが、これら四民は、それぞれの職能によって、基本的に国家を構成する者と認められた存在であった。それに対し、一八世紀後半の「人見弥右衛門上書」が「四民の外なる出家・山伏・神道者・遊女・歌舞伎・俳諧師・座頭・平家語り・幸若の類、すべて四民の衣食住を掠めて、世間無用の業を以て今日を渡る者、いわゆる遊民・食いつぶし」と記すように、江戸時代の儒教を中心とした考え方は「遊民」「食いつぶし」とされてきた人々や、同上書が記さない身分としての「穢多・非人」など、土農工商以外の人々は多く存在した。とくに江戸時代に大きな発展をみた都市は、彼ら「遊民」を無視しては成り立たないといっても過言ではなかった。本稿ではこの「遊民」の具体像を、堺市立博物館蔵の「月次風俗諸職図屏風」に描かれた図像を中心に取り上げ、その実態の解明を試みる。

### はじめに

「土農工商」。江戸時代社会の支配イデオロギーとして、しばしば使用されるこの言葉の語源が、中国の古典であり、総称して「四民」<sup>(1)</sup>とも称されたことはよく知られる。これら四民は、それぞれの職能に

よって基本的に国家を構成する者と認められた存在であるのに対し、それ以外は、天皇や貴族は別格として、一八世紀後半の「人見弥右衛門上書」<sup>(2)</sup>が「四民の外なる出家・山伏・神道者・遊女・歌舞伎・俳諧師・座頭・平家語り・幸若の類、すべて四民の衣食住を掠めて、世間無用の業を以て今日を渡る者、いわゆる遊民・食いつぶし」と記すように、江戸時代の儒教を中心とした考え方は「遊民」「食いつぶし」

とされてきたのである。

しかし「人見弥右衛門上書」が記さない身分としての「穢多・非人」を含めて、士農工商以外の遊民は多く存在していた。特に江戸時代に大きな発展をみた都市は、彼ら遊民を無視しては成り立たないといっても過言ではなかったはずである。

本稿で取り上げるのは、都市に充満していたこれら「遊民」の実体についてである。身分的に、はっきりと差別の対象とされた者たちはもちろん、身分差別とは別に、職掌自体が蔑視の対象ともなりえた下級宗教者・大道芸能者・物売り・職人などを含めて、その具体的実体を考えてみようというのである。もちろんこの問題はこれまでも多くの研究者が取り上げて考察している<sup>3</sup>。しかしそれらの多くは、記述を江戸時代の辞書類や随筆・俳諧書などの記事を羅列したものが多く、好事家的見解からなかなか出られぬものも多かったように思う。

たしかに近世の市井の様子は、それら雑書に記されるものももっとも多彩であり、またある意味では精確でもある。しかし互いの説を引き合ったり、考証しあったりしたものもあり、資料の性格の検証が必要でもある。といっても、私もこの稿で、どれほどにこれまでの研究に新しい見解を付け足すことが出来るかは疑問であるのだが、その点には気を付けながら、絵画資料を中心にして、若干の具体像を追求してみたい。

本稿で使用する基本資料は、大阪府堺市の市立博物館が所有する六

曲一双の中型屏風「月次風俗諸職図屏風」(以下「屏風」と略記する)で、作者などは分かっていない。手控えの粉本を用いて描いたと思われる、その用いた粉本の性格もはっきりしているわけではないから、研究資料に用いるには第一級の資料とはいえないのであるが、しかしそこに描かれた情景が、確実に江戸時代初期から中期にかけての都市に現われた遊民の姿であり、ある程度の実体を伝えていると思われる以上、取りあえず彼らの一つひとつを、他の文献に照らしつつ考えておくことはこれからの研究に資するものと考えられる。

この屏風については、すでに井溪明氏による紹介がある<sup>4</sup>。それによれば法量は各隻とも、竪七九・四寸、横二三五・八寸の紙本着色屏風で、画中の道路には薄く金泥が引かれている。旧所有者は不明であるが、京都市中の商家から出たものと伝えられる。井溪氏の調査によれば、画中には男性五一四人、女性一四〇人、子供三二一人の計九七五人が描かれ、商人二二四人、職人八〇人、大道芸六八人。他に武家五〇人、僧侶二四人と数えられている。

内容は月次絵であるから、正月に始まり一二月までの風物が順次描かれるが、場所は特定できない。家並みなどは唐破風の入り口をもつ江戸の商家と、「洛中洛外図屏風」などに見られる京都風の商家が混在するばかりではなく、描かれた風物自体にも、江戸の風物と京都にしかない行事が混在している。また登場する者たちも、季節を動かさない職掌は別にして、適宜に分散されて描かれており、必ずしも一般



図1 万歳

的常識と合致しているわけではない。

以下この「屏風」を中心に論を進めるが、「屏風」に近い性格を有する東京都世田谷区大場代官屋敷保存会蔵（世田谷郷土資料館保管）の「遊芸人図屏風」（六曲一双<sup>5)</sup>などをはじめとする適宜な絵画資料や、文献資料を使用する。それらの参照資料については、その初出時に若干の解説と注を加えることとしたい。

### 正月の門付け芸・大道芸

ケガレを祓うことを目的に訪れる門付け芸能者は、それぞれの節季を目前に登場するのが常であるが、正月の芸能者の目的は祝福であり予祝である。京都在住の儒者である黒川道祐の著書であり貞享二年（一六八五）の序をもつ『日次紀事』<sup>6)</sup>の正月条には、この月に訪れる門付け芸能者として千寿万歳（千秋万歳）・松拍子（松囃子）・猿舞・西宮傀儡師・春駒・鳥追・大黒舞・伊勢大神楽・鹿島事触・大原巫女・竈祓・獅子舞などを挙げ、市中を声高に縁起物売り歩く者として懸想文売り・歳八卦売りを挙げている。

「屏風」の正月は、右隻一扇・二扇の上半分を使って描かれるが、遊民の姿はなかなか豊富である。その一つひとつを取り上げて若干の解説を試みてみたい。

万歳（図1） 最初に目にはいる新春の門付け芸能者は、第一扇の中



図2 大黒舞と輪投げを演じる放下師

央に描かれる万歳である。万歳についてはすでに拙稿<sup>(7)</sup>があるので、詳しくはそれを参照していただくこととするが、その稿では江戸の三河万歳の成立が、三河時代の徳川家臣団を旦那とした「舞々」<sup>(8)</sup>がその原型であり、三河武士の関東入部によって、旦那場を拡大したものであること。また本来声聞師の権益とされていた京都の千秋万歳<sup>(9)</sup>が、豊臣秀吉の声聞師尾張移住政策によって解体し、江戸時代以降は京都の武家方には大和の舞々が参勤。禁裏や公家方には、京都に戻ったかつての声聞師大黒の党がしばらくは参勤していたことなどを述べておいた。ただし江戸時代に洛中の家々を巡った万歳については、はっきりした資料がなく、京都所司代に参勤した大和万歳が、どれだけ町方に旦那場をもっていたかは不明である。

大黒舞(図2) 同じ扇の右隅に放下ととともに描かれる。大黒舞は大黒天の姿をした者が、打ち出の小槌を手に新春の門を訪れる祝福芸能者であるが、正徳三年(一七一三)の跋文がある「滑稽雑談」<sup>(8)</sup>には、京都の様子を「これも悲

田寺四ヶ所の垣外の類、大黒天の姿を模し、面をかぶり頭巾を着て、民間の門々に歌ひ舞ふ、年々嘉祝の詞を以て新作して唄ふ故に、この唱歌をも大黒舞といふ」と記されている。その少し前、元禄五年（一六九二）の序のある井原西鶴『世間胸算用』にも「東隣には舞まひ住けるが、元日より大黒舞に商売を替ければ、五文の面、張貫の槌ひとつにて、正月中は口過すれば、此烏帽子・直垂・大口はいらぬものとして、二匁七分の質に置いて、ゆるりと年を越ける」とあって、普段は舞々を業とする者が、正月には大黒舞に変身する場合もあつたことが知れる。これらはいずれも上方の例である。

祝福芸としての大黒舞は、中世後期に京都の声聞師たちが演じた左義長の囃子舞の仮装からでたものと考えられる<sup>9)</sup>。またこの大黒舞は、全国の舞々などの正月芸能としてあちこちで演じられたようで、その姿や歌を書き留めた資料は多い。芝居でもこの舞を取り上げたようで、「歌舞妓事始」<sup>10)</sup>の大坂芝居の箇所、「正月に至りて大黒舞と云ものを兩人出て舞ふ」と記し、その謂われを「もとこれ美濃国より出る、民家にて春のことぶれをなすにこれを唄ふ」「美濃国大垣の人語りけるは、我国に舞まひと称する者あり、常には農人なり、正五九月には札を配り歩いて米銭を乞ふ、その札暦日の事を少々しるしてあり、正月は肩衣を着大小の刀をさし、人家の庭に立て、その年の大小の月の数吉凶などの事を云ひてありく、これを又さんばやしとも呼ぶ」と本来は美濃国における舞々の所行であつたという説を記している。

なお嘉永六年（一八五三）の跋文のある喜多川守貞「守貞漫稿」によれば「大坂は今も之有、江戸は無し、是亦三都ともに昔は在て、今世節季候江戸に残り、大黒舞大坂に存せり、毎歳元日毎町に在る四ヶ所部下を置、其親方と云て四ヶ所に居て、長吏下の者、或は自ら為、或は雇夫以て之為。雇夫の者を多しとす。その扮、新製広機木綿・鳥綿入等に、博多帯をしめ緋縮緬の投頭巾をかむり、三絃を弾てその一町の毎戸に来る。その唱歌を半紙紙に印し之投、十二文或は米一盆を受るに差あり、昔は大黒を扮して来りし歟」と幕末には江戸ではなかつたことや、大坂の大黒舞もすでに大黒の扮装はせず、三味線の囃しなどを用いていたことを記している。大黒舞の歌謡は「淋座敷之慰」<sup>12)</sup>や「丹波峰山領風俗問状答」<sup>13)</sup>「里話集」<sup>14)</sup>などに載る。

放下師（図2）「屏風」では大黒舞の隣りに締太鼓のリズムに乗せて輪投げをする大道芸人が描かれる。辻放下の一種である。曲技をなす放下師は、祝言を述べるだけの門付芸とは違い、訓練が必要であるため、専門芸能者によって演じられた大道芸であつた。それ故に本来は季節を限定せず人の行き交いが多い場所に出たのである。放下については別に記す。

傀儡師（図3）一扇左に大きく描かれて目を惹くのが、西宮の傀儡師である。これについてもすでに拙稿<sup>15)</sup>があるからそれに譲るが、基本的には箱を首から掛けた者二人が一組になり、一方が人形、もう一方が囃しを奏する人形を操る。おそらくはこの姿で門付をし、あらか

図3 二人連れの傀儡師



じめ要望のある大家では、座敷に上がって大型の人形に代えて、語り物を地に本格的な人形操りを演じたに相違ない。

スタスタ坊主(図4) 第二扇の右部に描かれる。寒中に裸で水垢離を取って代願したり、目出度い祝言を申し勇ましく踊る願人坊主で、技術を必要としないため、一種の乞食芸とされた。歌舞伎作者の二世瀬川如皇が、文化九年(一八一二)に著した『只今御笑草』<sup>16)</sup>には、「今も折ふしには見受る者ながら、明和の初迄は数多ありて、町々をあるきものせる。そのさま、あか裸にて、してさげたる注連の如きものを腰の程に巻き、大注連の如く拵へたる薬の鉢巻しめ、やれ扇錫杖を持ち、さも勇ましく踊りものして、すたすたやすたすた、すたすた坊主の来る時は、世の中よいと申します、とこまかせて、よひとこなり、お見世も繁昌でよいとこなり、旦那もおまめでよひとこなり、とこまかせてよひとこなり、其外にもよいとこ尽しをしゃべりものして、門々を踊り歩けり」と記しているから、江戸時代前期には三都で盛んであったようである。また天保四年(二八三三)の『愚雑俎』<sup>17)</sup>には「歳末に京棋の間に来るすたすた坊主といふ者あり、素肌坊主の転化せしものなるべし」とあって、京坂では歳末の門付とされている。『続飛鳥川』<sup>18)</sup>では「すたすた坊主、裸にて腰に注連をはり、薬の



図4 スタスタ坊主

鉢巻をする」と他書と同じ説明をするが、詞が違い「すたすたや、すたすた、すすたあたまに大鉢巻、ゆんべも三百はりこんで、それゆゑ裸の代参り、独角力、すもふ取ならかうとるものだ、あいなんのこつた」と戯けている。拍子にかかった調子のよい詞が人気があったよう、安永四年（一七七五）初演の浄瑠璃『恋娘昔八丈』の白木屋の段では、セリフをこの拍子にかかって云い人気を得たという。もっとも幕末の『守貞漫稿』には「昔は三都とも有り。今は京坂にあり江戸になし。寒風の日乞食坊主裸体にて繩の鉢巻をしめ、注連繩を腰蓑の如く巻き、手に三五寸の竹を割かけ、錢五七文を串に貫き、わりかけの竹に挟み、これをふりならし踊て云く、詞にすたすたすたすた、すたすた坊主の来る時は、腰には七九のしめをはり、頭にしつかつわをはめて云々」とあるから、京坂では遅くまで存在していたらしい。

わいわい天王（図5）一三扇目の中央に描かれるのはわいわい天王である。これも願人坊主の一所行で、『守貞漫稿』には「或人云、江戸は大略文政前、貧巫乃ち神道者の所行ならん、其の扮猿田彦の仮面を着け、古き黒定紋付羽織、並びに袴をはき籠なる両刀を佩きたり、其詞に、わいわい天王さわくがおすき云々、衆童追行の時、紅摺の牛頭天王小牌を散す、紙牌也、而後毎戸一錢を乞也。此行京坂に於いては無き也」とある。幕末の書が「京坂には無き也」と断定しているから、この図も江戸のそれかも知れない。ただし猿田彦の面を着けた者以外に代参の水垢離を取る一行が大勢描かれる。この形態が古いもの



図5 わいわい天王の一行

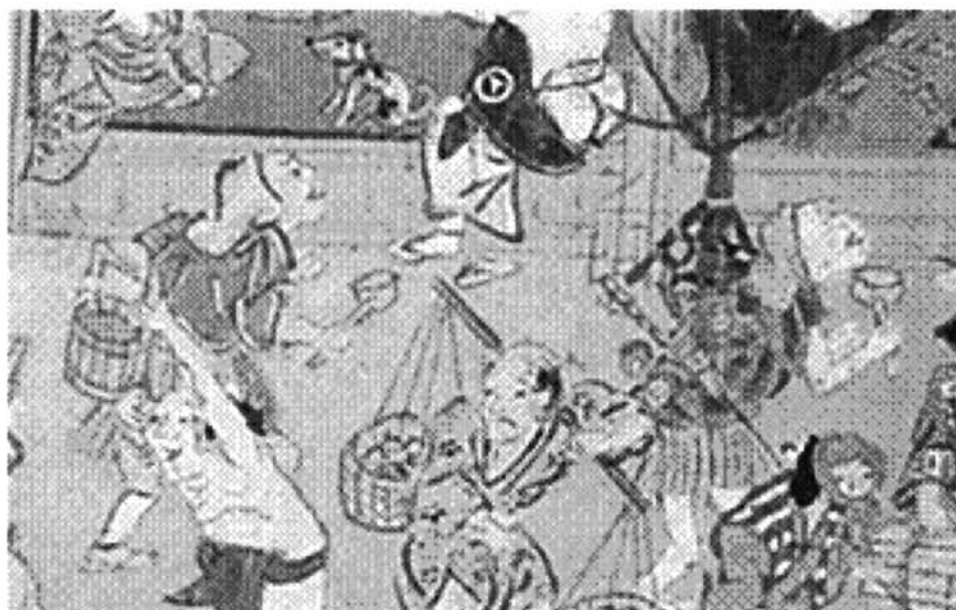


図6 物吉



と思われる。

物吉(図6) 柄杓を手に門々を廻る乞食の姿が二人描かれるが、たぶんは京都の悲田院の配下で、物乞いをしていた物吉と思われる。

物吉については『人倫訓蒙図彙』<sup>19</sup>に「竹の皮籠のすみぬりにはりたるを負て、洛中勧進にいづる、物吉といひそめしより、縁起よしとて名付しものなり」と記されるが、主に癩者の場合が多く、『日次紀事』の歳末の項には「此月尾、癩人自称物吉、遍歴戸々而乞米錢」と記されている。

その他「屏風」の正月の情景には、犬に追われる平家座頭<sup>20</sup>や、道を行く鹿島の事触などの姿が描かれるほか、足袋屋の店先では手枕で座頭の三味線を聞く者、カルタや盤双六をする男女などもみられる。扇屋・人形屋の店先や、江戸の破風造りの店構えの菓子屋とおぼしき商家もある。また正月らしく根羽突きや鞠突き、破魔弓を射て遊ぶ男兒なども描かれる。

## 二月の情景

通常、京都を題材とする月次絵が二月の情景として描くのは、稲荷祭<sup>21</sup>か涅槃会<sup>22</sup>である。しかし市井の風俗を描き出した「屏風」では、三扇・四扇の上部を使って虚無僧・熊野比丘尼・泡齋念仏・巫女舞の一座・鉦叩き・歩き巫女などの下級宗教者や芸能者を描出する。またさ

まざまな職人や商人なども描かれるが、その様子は二月という月にあまりとらわれずに描き出しているようでもある。

薦僧(虚無僧)(図7) 第三扇の上部、横軸轆轤を引く木地屋の店の前に、二人一組で立つ。黒衣に絡子をかけ、丸くけ帯に手甲・脚絆、深編笠という虚無僧姿ではなく、未だ普通の編笠をかぶる旅姿である点で古いと考えられる。もちろん乞食芸としての門付ではない。

泡齋念仏(図8) 三扇上部中央を占めるのが泡齋念仏の一行である。泡齋念仏は春彼岸に踊られた念仏踊の一種で、江戸系の月次絵では、二月の景物とされたようである。久隅守景の「十二月屏風」をはじめ、泡齋念仏を二月の画題としたものはいくつもある。

この念仏踊りは、享保一九年(一七三四)刊の『本朝世事談綺』<sup>23</sup>に「葛西の土人、鉦太鼓に笛をまじえて、躍念仏にて江戸の大路に徊す、これを葛西念仏と云ふ。泡齋と呼ぶ事は、寛永の頃、泡齋といふ狂人の法師ありて、町小路を奔る、わらんべ集まり、氣違よ泡齋よとはやせり、今以て云事ありて、氣違の名となれり、この泡齋、はやされて躍る形異形にして、人の笑をかさねしむ、かの葛西念仏が躍る所一様ならず、左へ飛あり、右へはねるあり、頭をうなだるれば、又一人は尻をふりて、をのがむきむき心々にして、定まれる拍子もなく、ただ物に狂ふがごとし、泡齋坊が躍るにひとしく、よつて泡齋念仏とよぶ、誠に氣違念仏躍ともいふべきなり」と記されているとおり、江戸葛西村(現東京都葛飾区)付近の農民たちが、彼岸の頃に市中に踊り出た

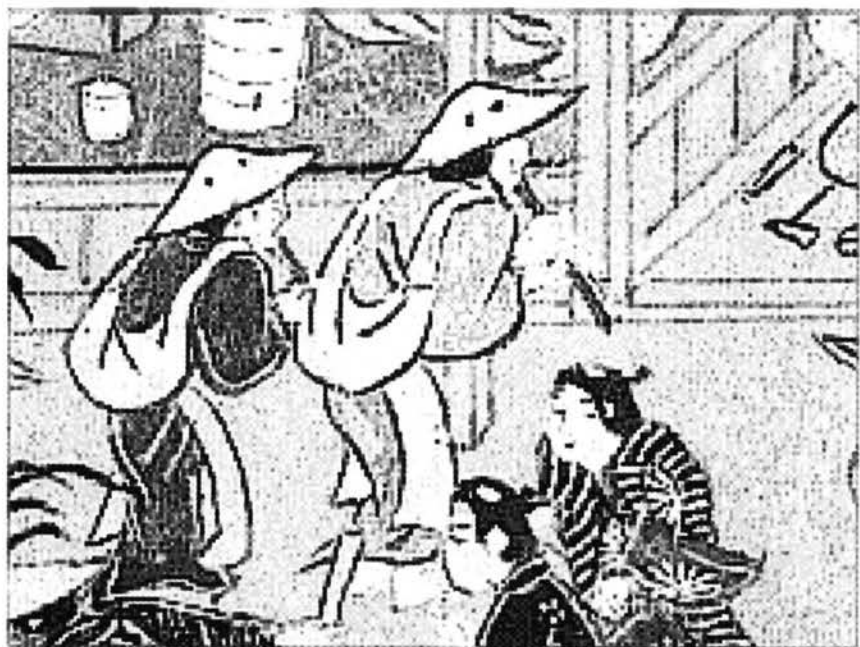


图7 虚無僧



图8 泡齋念仏



図9 「遊芸人屏風」の泡齋念仏

芸能らしい。彼らは講を組織していたようで、文化九年（一八二二）刊の『只今御笑草』には「これなん享保の頃に専らはやりし、宝暦の末迄も在家にても修行せし」と記されている。なお江戸の随筆家である喜多村信節が天保一四年（一八四三）に著した『筠庭雑考』<sup>24</sup>に「寛永年間の絵巻物に、泡齋念仏の図あり」とあるように、この念仏踊りは江戸時代初期にすでに有名であったらしい。なお江戸系の門付芸能者ばかりを描いた「遊芸人図屏風」には、この芸能者の張紙に「ほうさい」（図9）とある。

熊野比丘尼（図10）泡齋念仏の一団の右に描かれる。「屏風」では熊野比丘尼の姿はこのみではなく、九月の景物としても描かれる。熊野比丘尼は万治二年（一六五九）頃成立の『東海道名所記』<sup>25</sup>に、「いつのころか、比丘尼の伊勢・熊野にまうでて、行をつとめしに、その弟子みな伊勢・熊野にまいる。この故に熊野比丘尼と名づく。其中に声よく歌をうたひける尼のありて、うたふて勸進しけり。その弟子また歌をうたひけり。又熊野の絵と名づけて、地ごく極楽すべて、六道のあり様を絵にかきて、絵ときをいたし、奥深くおはします女房達は、寺まうで談義などもきく事なければ、後世をしらぬ人のために、比丘尼はゆるされて仏法をも勧めたりける也。いつのまにかとなへうしなふて、熊野・伊勢にはまいれども行をもせず、戒をやぶり、絵ときをもしらず、歌を肝要とす、みどりの眉をほそく、うす化粧し、歯は雪よりも白く、手足に胭脂をさし、紋をこそつけねど、たんがら

図10  
熊野比丘尼



染、せんさいちや、黄がら茶、うこん染、黒茶染に、白うらふかせ、黒き帯にこしをかけ、裙けたれてながく、黒きぼうしにて頭をあぢにつつみたれば、その行状はお山風になり、ひたすら傾城・白びやうしになりたり」とある。

万治頃にはすでに売色に走っていたようであるが、「屏風」の図では頭こそ菅笠になっているが、小脇には熊野曼陀羅を入れた箱を抱え、柄杓を差し出す小法師を連れているなど、熊野比丘尼の体は整えている。なお「遊芸人図屏風」が描く熊野比丘尼(図11)も、これと同じ装束である。ワシントンのフィリア美術館蔵の「住吉神社社頭図屏風」<sup>(26)</sup>などでは、人出の多い雑踏で熊野比丘尼が絵解きをしている図があり、古くは大道でも絵解きをして勧進を行っていた。ただし江戸時代に入ると『東海道名所記』が記すように、屋敷内に入り込み、曼陀羅図をつかって、主に婦女子に地獄の恐ろしさを説いたようである。

江戸時代も後期になると、もっぱら比丘尼売春の方が目立っていたようで、弘化四年(一八四七)の『賤者考』<sup>(27)</sup>には「地獄の絵巻物を昔はもちありきて、絵解して婦女輩を勧進したりしが、絵巻物はすたれて、一種の歌をうたひ柄杓を持ち歩くことなり」「京あたりにこの種あれども、売春同様にうちうち色を売る者なり。大坂もしかるにやあらん。その他の国々にもあるべし」などと記されている。彼女らが携えたのは絵巻ではなく、畳んだ曼陀羅図であったことは、箱に入れていることから分かり、すでにすぐれた研究もあるから参照さ



図11 「遊芸人屏風」の熊野比丘尼



図12 鉦 叩 き



図13 太神楽の一团

れた<sup>(28)</sup>。

鉦叩き(図12) 熊野比丘尼の下に二人の姿が描かれる。僧形で菅笠の旅姿である。

太神楽の一团(図13) 第四扇中央に大きく描かれているのは、鈴を手にした女性芸能者二人を先頭に、笛吹一人、二人の担ぎ手によって担がれた大きな道具箱の上に太鼓を載せ、それを打つ者一人など、計七人をグループとした芸能者の一行を描く。二人の女性は鈴をもち、千早を着ているから、巫女の体裁と思われるが、璎珞を冠むった派手な姿である。太鼓には御幣も付いている。私にははじめこの芸能の一团が何であるか分からなかったが、前述した「遊芸人図屏風」にも、ほぼ同様の芸能者が描かれ「大かぐら」とある(図14)。ただしこちらの図では、箱の上に御幣と獅子頭が置かれている。これなら獅子頭があることで、太神楽の初期形態であることが納得いく。これらの図によって、江戸時代初期の太神楽は、巫女舞を伴っていたらしいことが知れたのであるが(「遊芸人図屏風」では巫女は一人)、もう一度文献にあたってみると、享保一七年(一七三二)の「昔々物語」<sup>(29)</sup>に、

七十年已前、太神宮御祓太神楽とて、毎日江戸中徘徊しける有さま、儀式正敷、先へ鼻高き面をかぶりたる者、直垂に白袴を着、御幣を持立。その次に十四歳ばかりなる男子を美敷造り、璎珞を冠り長絹を着せ、白袴を着、中啓の扇を持ち、右の手に鈴を持ち歩む。三番に麻上下着たる男箱を持ち、四番に布衣の装束着たる

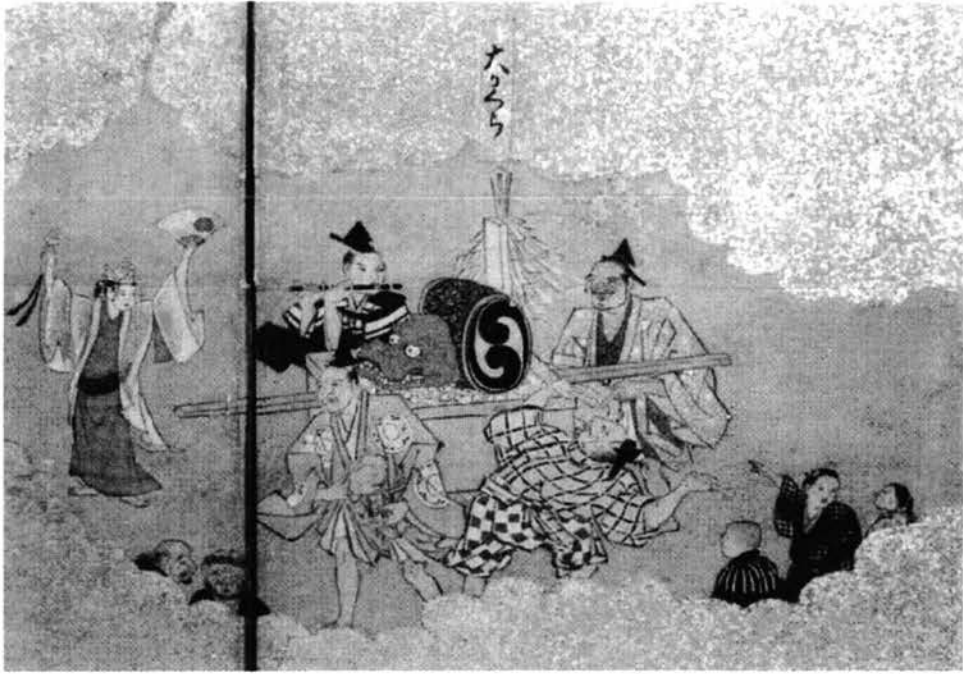


図14 「遊芸人屏風」に描かれた太神楽

男、その次に四ツ足附けたる大長持の蓋を取って仰向けにして置き、その上に獅子の頭をなおし、中に太鼓を置、一万度の御祓を真中に立て、御幣を立、この長持四人が六人にて昇ぐ者も、みな浄衣・烏帽子・白きくくり袴を着て、囃子方左右に附け、笛・小鼓・拍子打合いたる時、右の環珞冠りたる舞子神楽を舞、次第に拍子急に詰る。意識にしんとして、感にたゆるばかりなり。その内の興にどうけたる人等のため太鼓打、烏帽子左右へ筋違てかぶり、時々撥を空に投上げなどして、これを大なるどうけとして見物の者興に入るなり。

とあることに気がついた。すなわち明暦・寛文の頃（一六五五―七三）の江戸の太神楽は、若衆が巫女に女装して、鈴と中啓を手にして行列に加わり、舞を舞っていたらしいのである。「屏風」では肝心の獅子頭を描き忘れていたが、それを別にすれば、まさにこの図は江戸時代初期の江戸における伊勢太神楽の姿なのであり、巫女は若衆であったわけである。

その他、一人で道を行く歩き巫女や、青面金剛の姿を描いた軸を掲げる勧進僧の一人なども描かれる。また路上の職人として、鏡磨き（図15）、土臼の目立てをする職人など。店先の土間を借りて仕事をする草履直し（鼻緒のすげ替え）の姿もみえる。物売りとしてはざる売り・箕売り・杓子売り。商家では傘張りをする傘屋、塗師・蒔絵屋の店先、印籠を商う店などが描かれるが、中央を占めるのは横軸轆轤を

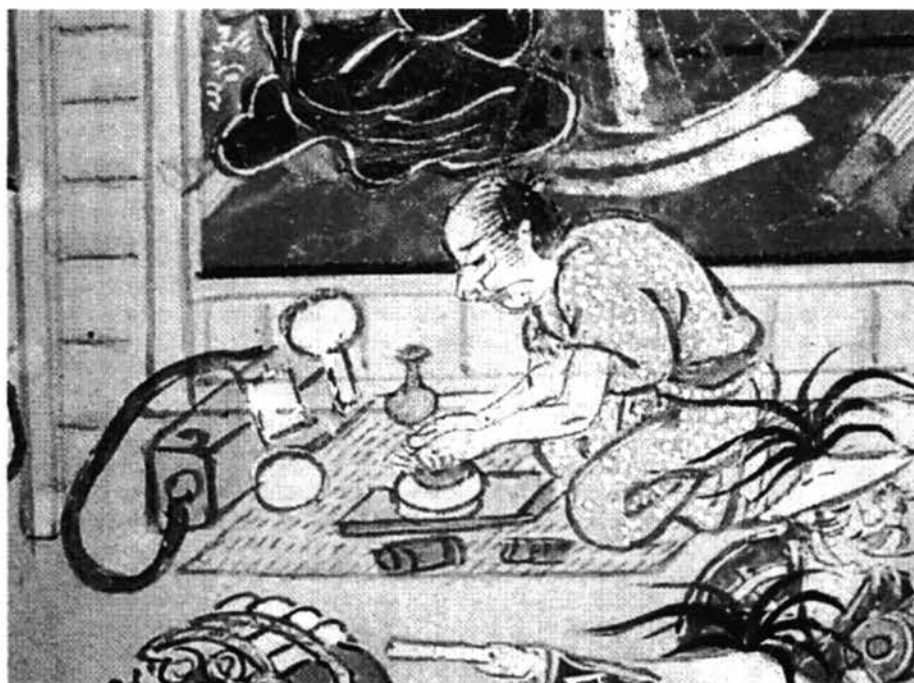


図15 路上の鏡磨き

挽く木地屋（図16）である。横軸の轆轤は木地を挽く轆轤で、力のあ  
る助手が、長い横軸にからげた紐を両手で交互に引いて回転させるの  
にあわせ、横軸の一端に取り付けた材料を、刃物を用いて加工したの  
である。

### 三月の情景

江戸時代初期の月次絵では、この月の景物として鬮鶏を描くのが一  
般的であるが、京都の場合は、時には千本閻魔堂の大念仏狂言なども  
描かれる。<sup>(30)</sup>「屏風」では子供たちによる鬮鶏と雛遊びが中心で、芸能  
者は放下の一種である綾織のみである。

綾織（図17）六扇の中央付近に描かれており、連れの三味線弾き  
の拍子に合わせて、二本の綾竹を投げ上げている（勸進柄杓を差し出  
しているのは隣りの鐘勸進でこの芸能者には関係ない）。

この綾織は住吉具慶筆の「都鄙図巻」（奈良興福院蔵）などにも描  
かれる大道芸能者で、元禄三年（一六九〇）刊の「人倫訓蒙図彙」に、  
綾織 かれが名をいふにはあらず、二ツ三ツ四ツの竹を以て上下へ  
上げ下ろす手品をいふなり、その意は機を織るには、横糸を通す  
時、竖糸上下をなすなり、今この業よく似たるをもつてあや織と  
言ふなり。

と記されている。放下師の芸の一種であり、室町時代の放下が綾竹を





図16 横軸轆轤を挽く木地屋

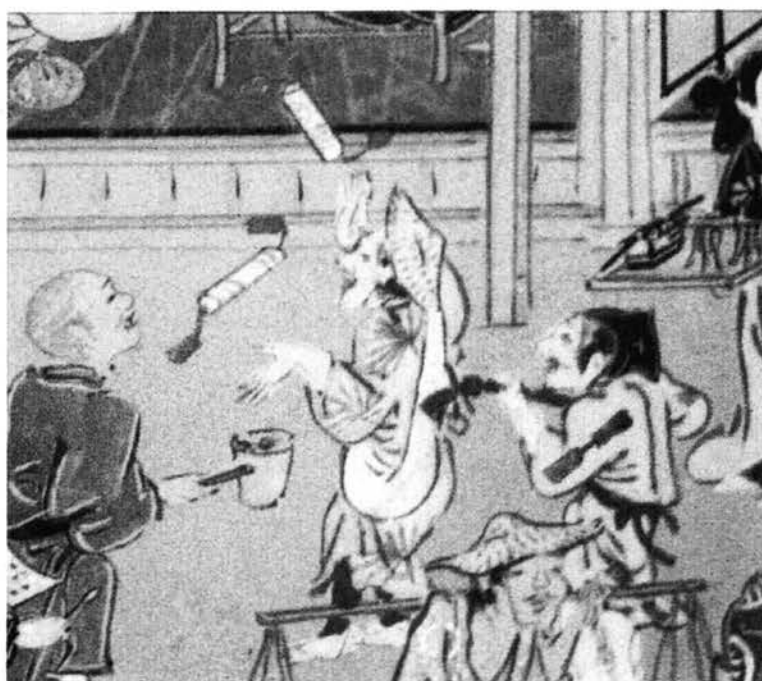


図17  
綾  
織



図18 鐘勸進の一行

打ち鳴らして小歌を歌ったことはよく知られているが、近世にはそれが曲技になっていたらしい。しかし三味線弾きを連れるから、何らかの歌謡は伴っていたに違いない。寛永年間成立の『竹齋』<sup>[31]</sup>には、「又或方を見てあれば、遊女遊君集りて、若き人々打交り、三味線・胡弓に綾竹や、調べ添へたるその中に」とあるのもこの芸能の変遷に参考になる。時代が下がると綾竹のみではなく、正徳二年（一七二二）刊の『和漢三才図会』<sup>[32]</sup>に「長さ尺ばかりの形、綾の巻絹の如くなるものを以て、七八本これに雜り、あるひは豆、あるひは鈴、あるひは小鞠、あるひは鎌、あるひは磁罍等を空に投じて童謡に和してこれを弄す」とあるように、さまざまな物を手玉にとって見せる曲技に発展したようである。

鐘勸進（図18） 铸造する鐘の絵を掛軸に描いて市中を勸進して廻るといふ勸進の形態は、江戸時代の常套手段であった。柄杓を差し出す聖と、勸進帳を読み上げる僧がみえている。

關鶏は平安時代から三月を代表する景物として「年中行事絵巻」などにも描かれているが、江戸時代に再び流行った時期があったらしい。宝暦七年（一七五七）の序のある『拾椎雑話』<sup>[33]</sup>に「延宝の頃鶏合はやり、我も我もと強き鶏を求めもてはやしけり」とある。

この月の店先では、玩具屋・張子人形屋・小間物屋などを描くが、ここにも唐破風のある江戸風の商家がみえる。また道を行く行商人ではキセル売り・陶磁器売り・箸売り・豆腐売りなどの姿や、雛人形を

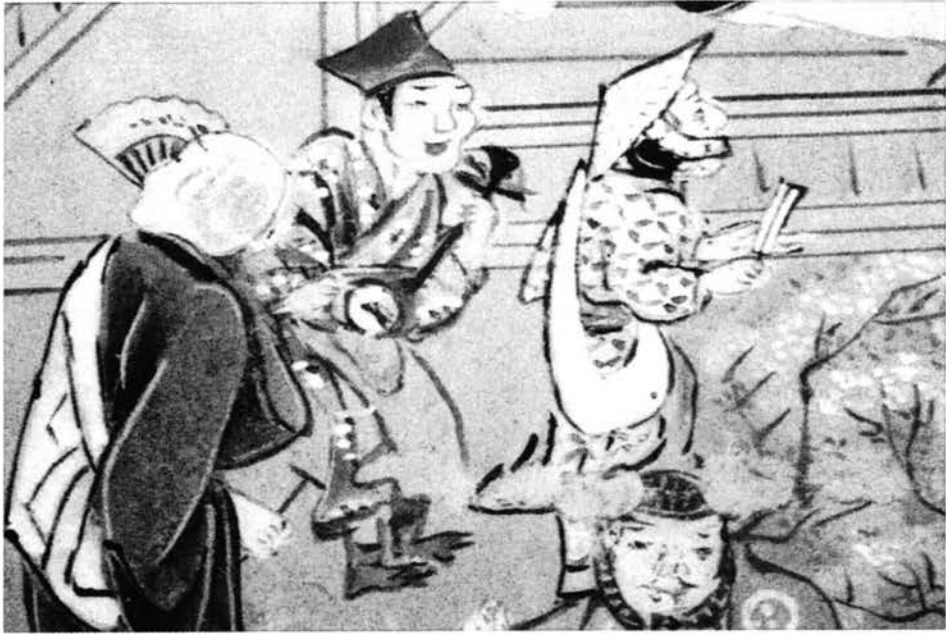


図19 胡弓を弾く間の山

籠に入れ振売りする者の姿もみえる。

この雑売りについては天保二年（一八三一）序の『宝暦現来集』<sup>34</sup>に、「明和・安永の始までは、二月中旬より乗物・ほかい・雑の道具と呼びて葛籠の両掛にして売来れり」とあり、江戸時代中期までは振売りで人形を売りに来ていたことを述べている。

#### 四月の情景

画面は第一扇の下部に戻って、ここには湯女を置く湯屋の情景が目惹く。大道に行く芸人では、胡弓を弾く間の山・猿曳き・鉦叩きなどを描くが、本来これらの芸能者は、必ずしも四月に限られたものではないはずである。

間の山（図19）湯屋の前に行く。江戸時代後期になると色町には浄瑠璃・新内・声色など、流しの芸人が行き交ったが、「屏風」には胡弓を伴奏に間の山を歌う二人づれの姿が描かれている。（間の山）は伊勢の内宮と外宮の間にある尾部坂<sup>おべさか</sup>という坂道のこと、ここには三味線を弾きながら《間の山節》を唄をうたって喜捨を請うたお杉・お玉と呼ぶ女芸人がいたと伝えている。この唄が著名となり、京坂の門付芸となったが、門付をしたのは女芸人ではなくて男にあるように胡弓を弾く男の芸能者であつたらしい。この《間の山節》は哀調を帯びた曲調で人気があつたらしく、近松門左衛門の「夕霧阿波鳴渡」や

図20 「遊芸人屏風」に描かれた辻説経



「傾城反魂香」などのなかにも使われている。

胡弓を弾く門付芸能者は、その後も全国的に残っていたようで、現在越中八尾の風の盆に残る胡弓や、五箇山民謡の胡弓などは、この門付たちの残したものと思われる。なおこの「屏風」には、胡弓がもう一カ所、三弦屋の店中(図28)に描かれるが、双方ともに丸形のものである。

また伊勢間の山の芸人は、幕末まで存在したようであるが、滝沢馬琴の『騎旅漫録』享和二年(一八〇二)八月十一日条に、

間の山の片かげに怪しき小屋がけして、木綿の振袖に模様あるものなど着て、顔はげるばかりに粧ひたる乞女、三絃をならし銭を乞ふ。されどその三絃の曲節もいと騒がしきものにて、今江戸の芝居にてする相の山の章歌には似ず。老婆は小屋の前にて草履を作りこれ売る。参宮には雪踏を許さず。ゆゑに旅人多くはこれを買うてはけり。また七八才の児女はささらをすりて銭を求む。一尺ばかりの木にぎざをつけこれをささらにてする。左右の手を前へ出し、首をふり腰をかがめ、ハアハアと言ふてささらを鳴らす。舞ふにあらず踊るにあらず、いとふつつかなる様なり。その外の乞女は手に箆を持ちて、往來の旅人につき、日々の活計をなす者多し。

と記されるように、江戸時代前期の面影はなくなっていたらしい。

なお時代が下ると、ささら摺りと胡弓弾きが連れ立ってくることも



図21 猿曳き

あったようである。「遊芸人図屏風」がそれで、これを付箋では「辻せっきやう」(図20)としている。元禄三年(一六九〇)刊の『人倫訓蒙図彙』も同様に、この二人連れを「門説経」としているから、元禄時代には胡弓と摺りささらで、説経を語った門付もいたに違いない。

猿曳き(図21) 猿曳きの姿がここに見える。猿引きは本来正月・五月・九月に旦那場廻りをした芸能者で、厩の祓いをするのが目的であった。また猿遣いも馬の医者であったともいわれる。しかしこの図に二人が一組で道を行く猿遣いは、完全に大道芸人である。この芸能者についてはすでに私も論考<sup>(35)</sup>したことがあるし、すぐれた先人の研究<sup>(36)</sup>もあるから詳しくはそれに譲るが、彼らは猿の仕込みに長い期間を掛けており、その意味では專業の大道芸能者であった。またそれ故に差別もされたのである。

その他この月の大道には山伏とともに鉦叩きや、振売りの行商人として竹の子売り・鉄瓶売りなどの姿がみえる。また商家としては下駄屋・反物屋などが描かれているが、大変に珍しいのは多くの座頭が描かれる点である。

座頭(図22) ここに描かれるのは芸能者としての座頭ではない。無事に出産した商家に祝いに群参し、祝儀



図22 出産の祝いに来た座頭衆

金を求める座頭の姿である。前述の「拾推雑話」には、昔より座頭・贅女、婚礼・祝儀・法事施物料遣し来る所、元禄の頃まで祝儀式・三貫文を高にしけるを、宝永・正徳より段々相増、享保に至り廿貫・三十貫と云ひ、出す者は前格より出さずと云へば、盲人共来り、三・五十人その家に詰かけ昼夜となくわめきのしるさま法外言語に絶えたり。役所に訟へても、はきはきと仰付られもなく、その頃江戸に惣検校あり、小浜に山崎検校、重田勾当等ありて、座頭の勢ひつよく、これをいかんとも致方なく、難渋なりし所、元文二年、惣町より相願ひに付き、御吟味の上、富家第一十貫文と究め仰付らる。双方しづまりし。

とあって、富家に祝い事があると、座頭が集まり祝儀を貰う習俗があったことが知れる。一種の相互扶助の社会システムであったと思われるが、それが嵩じて一種のたかりになったらしいが、元文年間（一七三六〜四一）に取り決めがなされたという。京坂にはこのようなことを聞かぬから、これも江戸の習俗であったに違いない。この図では祝儀を出す者に出産の喜びが感じられ、未だ問題がなかった頃の様子と思われる。

### 五月の情景

この月の情景は端午の節句である。各商家の店先には幟や兜が多数



図23 合戦に興じる子供たち

飾られている。本来幟には家紋や鍾馗の絵が描かれるが、「屏風」では家紋はあるが絵はない。幟竿がいずれも武器であることから考えて、江戸の飾りを描いたものと思われる。京都などでは軒に菖蒲を茸くのが一般的であるが、この絵にそれはない。ただし道を行く担い売りに、天秤棒の両端に吊した籠に粽をいっぱいにした者や、根付きの菖蒲を売る者が描かれる。

しかし何といっても画面の中心は玩具の武器を手に、合戦に興じる子供たち(図23)で、手製の幟や兜をつけた子供たちのさまざまな様子が大勢描かれている。またそれに使用する刀を売り歩く者の姿もみえる。本来この月の景物といえば、子供たちの印地打ちや、菖蒲刀の合戦であったはずだが、ここにはその情景はない。ほかに子供遊びとしては、高価そうな車付きの飾り馬に乗り、それを曳かせる子供などもみえる。

一方この月は、路上で修理などをする職人の姿が描かれる。一人は桶直し(図24)でたがの修理を、もう一人は鋳掛け屋(図25)で鍋の修理を行っている。

また季節柄、風鈴売りとおぼしき者の姿もみえている。

### 六月の情景

京都の六月は祇園祭の季節であるが、「屏風」ではその様子は描か



図24 路上の桶直し



図25 路上の鋳掛け屋





図26 疫神送りの風流踊りと子供の亀吊り

れず「大神宮」と書かれた箱万燈を掲げた揃いの衣装の踊りの一行が、五扇・六扇に渡って練り歩く様子を大きく描いている。疫神送りの風流踊り(図26)の一行であると思われるが、具体的にどのような芸能を想定しているのか不明である。江戸の疫神送りなのであろうか。六扇中央には曲技を演じる大道芸の放下師の姿がみられる。

放下師(図27) 街角に筵を敷き、片肌脱いだ男の叩く太鼓に合せて、細竹の頂きに茶碗を載せる曲芸を演じている。この芸はのちに伊勢太神楽が演じるようになるが、本来は放下師の芸で、京都の市中を描いた江戸時代の「洛中洛外図屏風」でもお馴染みである。<sup>37)</sup>

商家の職種は琴・三味線・胡弓を並べた楽器職人の店(図28)、園芸種の草花を並べた店、盆栽屋の三軒が唐破風のある江戸風の建物の棟を割って描かれ、道を挟んで団扇職人の店が並ぶ。路上には夏の真っ盛りとあって瓜売り・心太売り(図29)・水売りなどが客を相手に商売をしており、酢の計り売りや桃売り(図30)などの姿もみえる。また人家の軒を借りる鉄瓶の口直しなどの職人の姿や、亀吊り(図26)をして遊ぶ子供の姿が珍しい。

### 七月の情景

「屏風」は左隻に移る。一・二扇の上部には七月の盆の情景が描かれるが、その右半分は盆の風流踊り(図31)の様子である。筵を敷い



図27  
放下師



図28 楽器職人の店



図29 心太売り



図30 酢の量り売りや桃売り

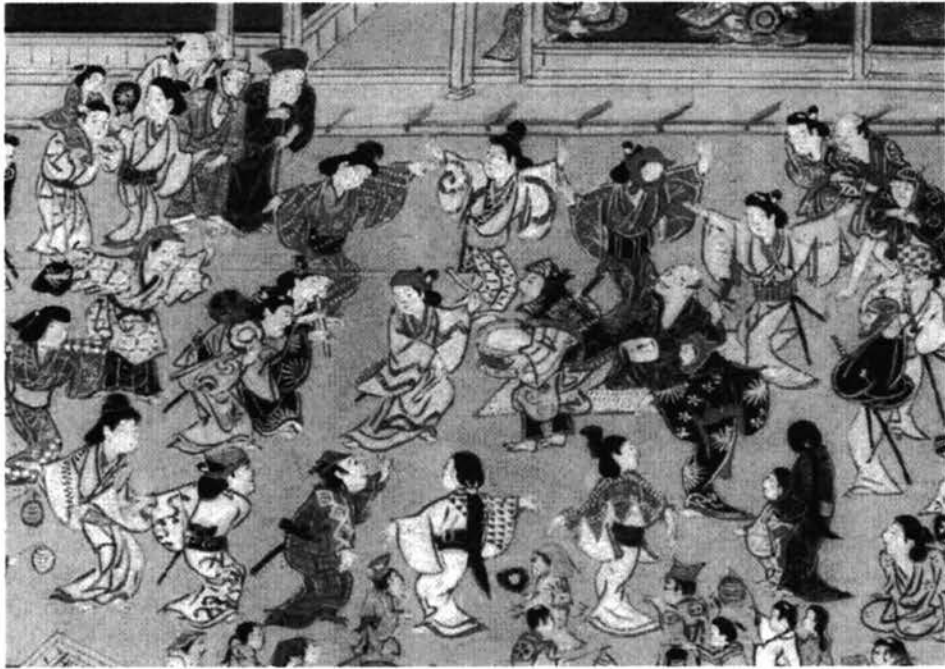


図31 盆の風流踊り

た上で三味線を弾くのは盲目の座頭であり、締太鼓をもつ者と叩く若衆、鼓打ちの若衆、堅笛（二節切か）を吹く野郎帽子の若者などを中心に、思い思いの衣装に着飾った男女が輪になって踊る。左半分は盆の支度に忙しい庶民の様子を描くが、そのなかに念仏太鼓を打つ一団がいる。もしかしたら六齋念仏のつもりかも知れないが、形態は異なる。

六齋念仏（図32） 僧形の者数人の集団で、小型の鉦止太鼓を胸に掛けて打つ者と、鉦を打つ者とが描かれる。太鼓の形態は京都を中心に、上方で行われる六齋念仏が使用する太鼓と同じ形態であるが、本来京都の六齋念仏は、都市近郊農村部の若者たちが、盆などに市中を廻るもので、僧侶が演じることはない。<sup>(38)</sup>しかし「遊芸人図屏風」(図33)にも同様の僧形の念仏衆による一行が描かれ、付箋に「ろくさい」と記しているし、出光美術館蔵の「江戸風俗図屏風」にも同じような図柄が描かれているから、江戸系の画家はこのような姿を六齋念仏と考えていたのかも知れない。

なお路上には盆月らしく、蓮の葉や花を座売りする者、同じく荷売りで道を行く者、切子灯籠売り、盆太鼓売りなどの姿がみえる。

盆太鼓売り（図34）は、「宝暦現来集」に「寛政三年六月迄は、夏になると盆太鼓とて、手遊を売来る、さし渡し五・六寸位に、竹の輪に西の内紙にて張り、阿膠を引、あやしき公家の絵を書、持所を長さ五寸程の柄を付、箸にて打ながら、盆太鼓々々と云ふて売来しが、



図32 六斎念仏衆



図33 「遊芸人屏風」に描かれた六斎念仏



図34 盆太鼓売り

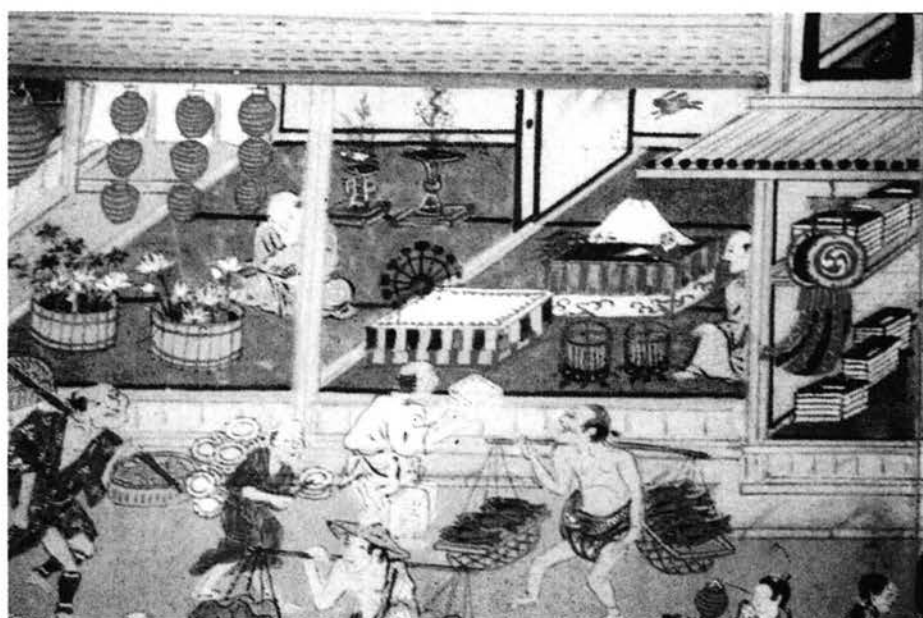


図35 盆灯籠が並ぶ店先



図36  
ささら説経

その後更に不來、一ツの価十文・十二文位に売りけり、是を女子ども盆歌を唄ひ歩行」とあり、盆の頃に子供たちが踊った小町踊りに使う太鼓を売りに来たことが知れる。ただしここに書かれるのは団扇太鼓らしいが、「屏風」の太鼓売りは小型ではあるがちゃんとした締太鼓である。京都の小町踊りを描く絵<sup>(39)</sup>では締太鼓が使われている。締太鼓の方が古い形態なのであろう。

江戸風の大きな破風のある二階建ての商家の店先には、盆灯籠が並ぶ(図35)。軒に吊された灯籠には切子灯籠・船形灯籠・花を入れた手桶形灯籠・太鼓形灯籠など、手の込んだ細工の灯籠がみえるが、隣家の店先には、富士山や淀の河瀬の水車など凝った意匠の置き形細工灯籠が占領している。

### 八月の情景

左隻三・四扇の上部に描かれる八月の情景では、芸能者が多彩に登場する。

ささら説経(図36) これについてもすでに拙稿<sup>(40)</sup>があるから詳しくはそれに譲るが、大唐傘をひろげ摺りささらを摺って説経節を一人でするのがその芸能である。大道芸として人の通行の多いところに筵を敷いて語るのが一般的であるが、時代が下ると門付も行った。近世中期までの多くの風俗絵画に、三都ともに描かれる。



図37 八丁鉦

八丁鉦(図37)「やつからかね」とも称す。これについては別に稿を準備しているが、子供もしくは若衆の大道芸で、図の如く鉦を敷きその上で八丁の鉦を首から掛け、それを回しながら撞木で打ち分ける。延宝三年(一六七五)刊の『談林十百韻』に、

八丁がねもさえかえるそら  
 筵なら一枚ほどの雪消えて

とあるが、この芸能自体は古く、『看聞日記』永享四年(一四三二)九月一日条に、「勸進金 小兒八歳云々、金十二丁懸て打、甚神妙也。」とあるのが早い。また『北野天満宮史料』所収の「目代日記」天正一三年(一五八五)六月条に、「廿五日ニ松梅院ヨリ中間与二郎ヲ以、新平殿ヨリにて候、あの八からかねの六十六部ヲハ是ヨリ置候哉、案内申候つる由申候か。」と記される。

このおりに「八丁鉦」を演じたのは、もちろん六十六部自身ではなく、別の記事に「同道二人」とあるもう一人、おそらく若衆が演じたであろう。『兼見卿記』天正一八年九月三〇日条には、

六十六部経聖来、ヲトリ念仏所望、希代驚目訖、差餅酒五十疋遣之、廻念仏十才・十一才也、同行五人。

とあり、数人の若衆を同道する場合もあったようである。江戸時代にはいると絵画資料にも多く登場するが、その姿は京坂ばかりではなく、出光美術館蔵「江戸風俗図屏風」や、国立歴史民俗博物館蔵「江戸図屏風」「職人尽図巻」「遊芸人図屏風」など多くの風俗絵画にも描かれ



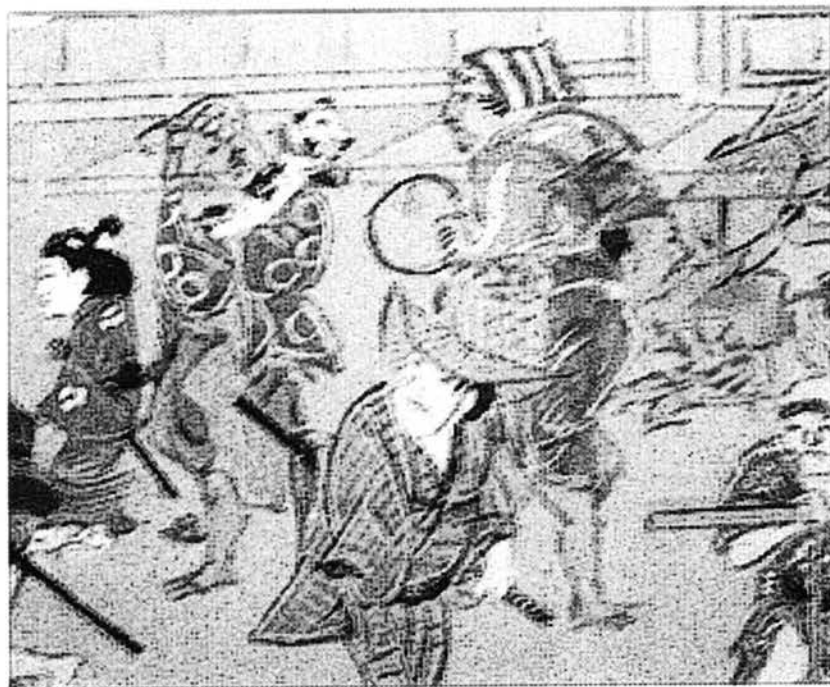


図38 犬の曲芸師



図39 「四条河原遊楽図屏風」にみえる犬の曲芸



図40 三匹獅子舞



図41 「遊芸人屏図風」に描かれた三匹獅子舞



図42 出開帳

ている。

犬の曲芸師(図38) 犬に芸を仕込んで演じさせる例は、名古屋の『見世物雑誌』<sup>(41)</sup> 記載の「犬の踊り」などもあるが幕末のものである。それより静嘉堂蔵の「四条河原遊楽図屏風」に、南蛮風俗の者が犬の輪潜りをみせる小屋掛けの一座を描くが(図39)、この道を行く芸人は一人が犬を、一人が輪をもっており、この一座と同様の芸を演じたに違いない。

三匹獅子舞(図40) 現在関東地方一円に残る民俗芸能である三匹獅子舞の源流が、雌雄二匹であつたらしいことを私はかつて論じたことがある。<sup>(42)</sup> この獅子舞の特色は、若干の例外を除いて、関東に、それもかつての徳川家臣団の城下町に濃厚に分布する芸能で、三匹(当初は二匹)の独り立ちの獅子を中心に、まわりを四人の四角い花笠をかぶったささら摺り(一人が笛吹である場合もある)が囲む陣形で演じられることである。「屏風」と同様の二匹立ちの獅子舞は、国立歴史民俗博物館蔵「江戸図屏風」にも江戸城外の堀端に描かれているが、季節的には雨乞いや秋祭りに多く演じられたために、八月の画題になったものかと思う。江戸特有の芸能で京坂にはないものである。なお「遊芸人図屏風」が描く獅子舞は現在の三匹獅子舞と同じ三匹立ちである(図41)。

この月にはすでに完成した仏像を人夫に担がせて、喜捨を



図43 菊花の担い売り

乞う僧侶の一団が描かれる。担い箱の上に置かれた仏像の前には庵看板が立てられその由来が書かれているから、一種の出開帳(図42)なのである。

担い売りの情景としては、松茸売りが描かれるが、これは京都あたりの情景であろうか。露店では糖粽が売られ、賑やかに飾り立てた笈を背にした香具師の姿もみえている。

道沿いの商店では、鋳物屋や、懸守りを売る店があるが、二月と同様に、横軸轆轤を挽いて器を製造する木地屋が描かれる。

### 九月の情景

左隻五・六扇上部を占める九月の景物は、まず菊である。菊が園芸種として盛んに育てられるのは江戸時代に入ってからとされるが、「屏風」では、店に園芸種の菊を並べて観賞する情景と、菊花を担い売り(図43)する姿が描かれる。この月には目立つ大道芸能者はいないが、その代わりに五扇の中央には子供たちの担ぐささ御輿が大きく描かれる。

貴船のささ御輿(図44) この御輿については「日次紀事」の九月一日条に

自今日至九日、洛下兒童舁小御輿、謂貴船狭小御輿、各拍之振市中、伝云後奈良院時、一年九月、舁小兒疫癘大行、是称貴船之崇、



図44 貴船のささ御輿

各造小御輿、昇之而勸神行、故至今然也、

とあり、延宝二年（一六七四）刊の「山城四季物語」<sup>(43)</sup>にも「重陽の日、洛中の童子小き輿を掻ありきて、貴布ねの輿といふ事（中略）弘治二年重陽の日宣下ありて、疫病ををさせ給ふ、それより洛中の童子、神をなぐさめんとて神輿を祭るとかや」と記す。弘治二年（一五五六）に始まった行事というから、さして古いものではないが、京都特有の九月の行事で、早くには上杉家本「洛中洛外図屏風」<sup>(45)</sup>にその様子が描かれる。もしこの行事が弘治二年に始まったものだとすれば、上杉家本「洛中洛外図屏風」はそれ以後の成立ということになるのだが、未だその成立論争にこの記事が問題とされていないのは不思議である。

その他この月には、茶筌売り<sup>(46)</sup>が僧形の鉦叩きと一緒に描かれる。茶筌売りについては「近世の民衆と芸能」のなかの「鉦叩き」で詳しく書いたからここでは再述しないが、これも京都特有の下級宗教者で江戸にはなかったように考える。しかし「遊芸人図屏風」にも描かれる<sup>(47)</sup>こともあり、ひょうとしたら江戸にもいた可能性も捨てきれない。なお本図では茶筌売りは鉢（瓢）を手手にしていない。私は「近世の民衆と芸能」で元禄期に向井去来が書いた「鉢扣ノ辞」（「風俗文選」所収）に、

寒の中と春秋の彼岸は昼夜をわかず都の外七所の三昧をめぐりぬ  
（中略）常は枝の先に茶筌をさし、大路小路に出て商ふ業かはり



図45 「上杉本洛中洛外図屏風」のササ御輿

ぬれど、さま同じければ、たたかぬ時も鉢  
叩とぞ申されける。

とあるのを受けて、「去来は茶筌を売り歩く時は瓢を叩かぬように記しているが、大永年間（一五二一—二八）頃の景観を描くとされる国立歴史民俗博物館蔵の「洛中洛外図屏風」（旧町田家本）には、瓢を叩きながら茶筌を売り歩く鉢叩きの姿を描いているから、やはり瓢を叩く音にあわせての売り声があったと思われる。」と記している。しかしこの絵などをみると、やはり九月などという普段の月では、瓢をもたずに茶筌のみを売り歩く場合もあったとも考えられるようである。ちなみにこの茶筌は、お茶を点てる道具もあったかもしれぬが、その中心は台所などで、木製品を洗う洗浄道具として使用されたはずである。

**鹿島の事触**（図48） もう一つ、六扇左隅に鹿島の事触とおぼしき者の姿が描かれる。鹿島の事触は本来鹿島神宮の御師として、その信仰を諸国に流布した神人であったが、元禄期の「人倫訓蒙図彙」に、



図46 茶筌売りと鉦叩き

毎年鹿嶋の神前にして行の事あり、神必人に託し給ひて天下の吉凶を示し給ふと、それを日本にあまねく告しらせける事、この神官の役なり、然らば末にはこれをもつて宮雀のすぎはひとなして、よい加減にあらぬ事までたくみなして、愚夫・愚婦をたぶらかすとかや。

とあるように、やがて神人ではない者が門付として家々を巡るようになったようで、『続飛鳥川』には「社人体の者あやしき事を申す」とさえ記されるようになる。

『守貞漫稿』には、「守貞幼年の頃大坂に来る、從來毎時来りと聞く、近年は来らざるか、折鳥帽子に狩衣着せる神巫一人、襟に幣帛を挟み、手に銅拍子を鳴らし、鹿島大明神の神勅と称し当年中に某々の天災あり、或ひは某々の疾病流布す、これを免れんと欲せば、秘符を授くべし等の妄言を以て愚民を惑し、種々の巧言を以て頑夫を欺き、金二朱或ひは一分、或ひは二三百文の銭を貧り取るなり、実に鹿島より来るにはあらず」と大坂におけるその実体を記している。また十返舎一九の『続木曾街道膝栗毛』（文化一三年刊）には「そのかどさきに立ちて往來の人を集め、しばらく鈴

図47 「遊芸人屏風」に描かれた鉢叩き



をふりならし」とあるから、手には鈴をもったらしい。その点この「屏風」の鹿島の事触は、背に幣束を負っていないし、手には銅拍子や鈴ではなく太鼓をもっている。しかし「遊芸人図屏風」では、太鼓をもっているものも描かれるから、古くはこのような姿の者もいたのかも知れない。なお正月に描かれる鹿島の事触は、手に御幣の付いた烏万燈を担いでいるが、後ろ向きのため、前に何をもっているかは分からない。

九月に描かれる店頭の職人は、竹細工師・組紐屋・鍛冶屋・栗屋などである。筵に栗を広げる光景がいかにもこの月らしい。

#### 一〇月の情景

一〇月は左隻一・二扇の下部にかえり紅葉狩りの一行が描かれる。炭俵を背に担いで運ぶ人々（炭売りか）など、冬支度を急ぐ市民の姿が描写されるが、左半分は路上で人形を遣って飴を売る飴屋（図49）の姿が目につく。水飴の桶を天秤棒に担いで、子供たちに飴を売るのであるが、その人集めに、打杖を手にした鬼の人形を遣っている。この人形を遣う飴屋は「遊芸人図屏風」や、国立歴史民俗博物館蔵「職人尽図巻」<sup>(4)</sup>（人形が鬼ではなく扇をもつ若衆）などにも描かれる。

歩き巫女（図50）の姿もみえるが、二月に描かれた歩き巫女が一人であったのに対し、こちらは袋持ちを連れている。「遊芸人図屏風」





図48 鹿島の事触

は袋持ちを従える同様の図柄の巫女舞を、「かまどばらい」(図51)としているから、この巫女も家々の竈を祓って歩く巫女なのかも知れない。

この月の商店の業種はなかなか豊富で、織物屋・染物屋・刺繍屋・面屋などが作業をしているところを描く。織物屋・染物屋が女性であるのに対し、刺繍をするのが男性であるのがおもしろい。また一扇右隅には托鉢の僧を、二扇中央の下部には竈を修理する職人の姿、同じ扇の左端隅には、独楽回しに興じる子供の姿が描かれる。

#### 一二月の情景

一二月の景物はお火焚きである。これは京都の行事であり、江戸に行われていた記録は知らない。「屏風」ではお火焚きをする子供たちの廻りに、いのししの子供を沢山描いているが、この画家は、上方で一〇月亥の日に行われる「亥(猪)の子」の行事を知らなかった可能性がある。「猪の子」に関する粉本もないまま、いのししの子供をここに描いた感じもするがどうであろうか。

なお亥の子は猪の子とも書き、新米で搗いた餅を食べる行事である。



図49 人形を操る鈴屋



図50 歩き巫女



図51 「遊芸人屏風」が描く竈祓いの巫女



図52 お火焚き



図53 子供の宮詣り

お火焚き(図52) 京都を中心とした一月の行事で、宮中よりもより社寺などでも行われたが、とりわけ町のお火焚きは子供たちの行事で、夕方から夜にかけて街角などで松薪を井桁に組み上げ、中央に笹を立て、これに神饌を供え、浄火を笹に移すして燃えあがらせ、神酒をかけて爆竹を鳴らした。江戸時代初期の風俗図では、御輿を置いているものもみかける。なお稲荷神社のお火焚きは、火を扱う鍛冶職人のお火焚きとして著名で、その他風呂屋・瓦屋など、火を使う職種でも行った。太陽のもっとも弱くなる冬至の時期に行う一陽来復の意味があったようである。

子供の宮詣り(図53) 四扇下部の中央には、赤い着物を着た子供を肩に乗せる女性と、供のものが描かれるが、供の女性の一人が何か祝いの物を捧げており、後に従う者も鯛や神酒を置いた折敷を頭上運搬している。近代では一月に子供の成長を祝って氏神詣りをする七五三が行われるが、それ自体は近代になってから始まった都市の商業政策的年中行事である。しかし江戸時代においても似通った子供の通過儀礼があったようである。たとえば女兒の三歳、または五歳の祝いとして、紐落としとか帯結び・髪置祝いなどと呼ばれる行事がそれで、この時初めて着物の付け紐を取って帯を結び、三つ身の着物を着て宮詣りをするのである。ほかにこのような行事を描いた絵画資料を知らないから何ともいえぬが、もしこの場面がそのような行事を描いたものであれば、大変におもしろい。後考を待ちたい。



図54 算置き

算置(図54) 四扇左隅に筵に座して身分の高い女性の求めて算木を置いている。算置は下層の占い師で、占置・見通しなども呼ばれた。算木を使って図に照らし、陰陽道系の占いを行ったらしい。古くは法師や山伏の姿であったが、江戸時代には図のように俗体の者が中心であったようである。「三十二番職人歌合」には虚無僧と対になって描かれるが、「置く算の相生したる花の時 風をばいれぬ五形なりけり」「輿ほどの飯屋のうちに身をおける 算所の者の恨めしの世や」の歌を載せるから、散所者という認識であったらしい。室町時代の公家伏見宮貞成の日記「看聞日記」にも、算置法師を召して占いをさせた記事がみえる。

店としては足袋屋と革細工屋を描くが、道路を使って二人の男が寒中というのに上半身裸になって白革のなめし(図55)を行っている。また一服一銭の担い茶屋や、土瓶売り・芝売りなどの姿もみえる。

### 一二月の情景

この月には新しい年を迎えるのに忙しい人々の姿が描かれる。道を占拠して歳末の必需品を売る物売りの筵の上には、海老・蛸などを含む多種多様な魚類、雉や山鳥などの鳥類、柿や栗・木の実などの果実類、兎・鹿・狸などの獣類、キノコや野菜、塗りの椀や折敷、白木の膳や三宝など、歳の市に相応しい多様な種類が並べられる。一方大福

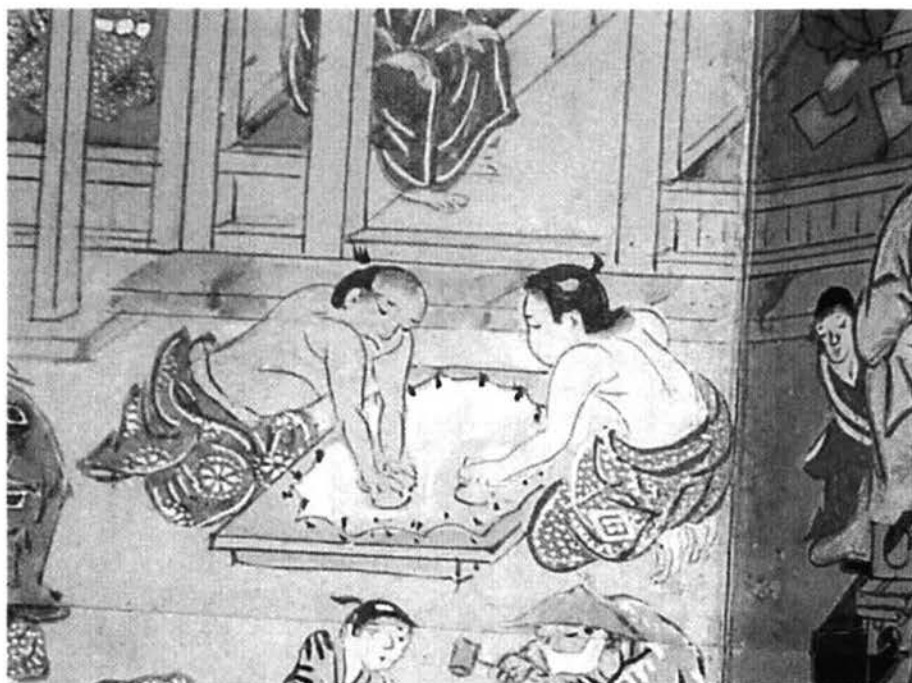


図55 白革のなめし



図56 節季候



図57 「遊芸人屏風」の節季候

帳を手にした掛け取りや、そろばんを腰に差した者などが行き交うが、そのなかにあつて家の門を訪なう節季候の一団の姿と破魔弓売りの姿が大きく描かれる。

この歳末の風景について宝暦二年（一七六二）の『淀古今真砂子』に「十二月一日にせきぞろ来る、すべてか様の類は初て両町奉行へ参初めて、夫より所々へ打廻る事也。十三日には事始とて正月の入用の品々うり始る、手まり・はま弓・ふりふりぎつちよう・はごのこ・花きつちよう、所々にてうる也。」とある。

節季候（図56）節季候についても「中世の民衆と芸能」に川嶋将生氏が、また『近世の民衆と芸能』には私が執筆をしてゐるから、そちらを参照していただきたいが、「屏風」に描かれた節季候について若干述べておきたい。

この「屏風」の歳末風景はどちらかといえは江戸のもののように思われるが、江戸の節季候については発刊年号未詳の『江戸じまん』<sup>(46)</sup>に、「節季ぞろハ赤前垂なく、百結衣を着、古編笠をかぶり、赤青の紙を細くたちて、笠の目ごとに括り附て飾となし、音頭世話しく、竹切を叩き、拍子を取り、見る影もなきむざくろしき姿なり。」と記される。しかしこの書が書くのは江戸後期の節季候の姿であろう。「屏風」や「遊芸人図屏風」（図57）の節季候は、赤前垂れや覆面をしており、笠には羊角

図58 破魔弓売り



とおぼしき植物を挿している。江戸の節季候も、古くは京都の節季候と同じような風俗であった可能性が高い。盆に米を入れて差し出す商家の女性が、さしていやな顔を見せていないのも、この図が描かれた時代が古い証拠である。

なお明治三八年刊「江戸府内絵本風俗往来」には、「しめ飾り売り始めし頃より、節季候と呼ぶ乞食町家の戸々に来る。編笠に紅白青の紙を細く切りたるを粧ひかざり、襦袢の衣類をまとひ、割竹を騒がしく叩き立て、エ節季ぞろ節季ぞろ さつさござれやござれ、ござれやござれ、せきぞろエツせきぞろ、毎年毎年、毎とし毎とし、旦那の旦那の、お庭へお庭へ、飛こみ飛こみ、はねこみはねこみ、この中に騒がしさに銭を投げて追ひ払ふ。」と記されており、この頃まではあつたらしいが、すでに乞食扱いである。

**破魔弓売り** (図58) 今では矢のみが正月に神社で縁起物として売られるようになってしまったが、本来は宮廷や民間で正月に射礼として矢を射たことに由来する。江戸時代には名前のとおり、邪気を祓う呪具として、暮の市で売られていたことが、この図や前述の「淀古今真砂子」などによって知られる。本「屏風」



の正月の景では、子供たちがその破魔弓で遊んでいる様子が描かれるから、男の子の正月の玩具となり、さらにそれが初節供の贈物ともなったようである。

なおこの月の店先は、経師屋、畳屋、長持・箱などの番匠細工師、質餅屋などを描くが、同時に畳屋とその隣家では大掃除の風景が、また質餅屋では竖杵による餅搗きが盛んに進行している。

### おわりに

この論考で中心資料として用いた堺市博物館蔵の「月次風俗諸職図屏風」には、まだまだ多くの遊民の姿が描かれている。私が解説が出来ない故に取り上げなかったものはもちろん、たった一度の実見であったが故に見落としているもの、また紙面や掲載写真の制約から敢えて取り上げなかったものなど事情はさまざまである。まずそれをお詫びしなければならぬ。

また粉本によって描いたと思われるこの屏風が、歴史資料としてどれ程の価値をもつかという議論になると、私自身若干心許ない。しかしその制約を乗り越えて近世という時代の「遊民」の姿を私たちに教えてくれることも確かである。彼ら「遊民」の姿を描いた絵画資料は、実はもともと存在するし、風俗画のいたる所に描かれている。それらを総合して、絵画史や歴史学や民俗学や芸能史学や風

俗史学などなど、多くの研究者が集まって意見を出し合いつつ、研究が出来れば、どれほどに楽しく、また豊かに江戸という時代の庶民の実相を、明らかに出来るか計り知れない。それが実現する日を夢見てひとまず筆を収める。

なお、貴重な資料を拝見するにあたり、お世話になった堺市博物館の井深明氏や、世田谷区立郷土資料館の武田庸次郎氏に御礼申し上げます。

### 註

(1) 中国の古典に起源する言葉で、わが国では「神皇正統記」が士を官に仕える者として使用するのが早い。江戸時代になると、当時の体制を中国古代の封建制になぞらえて理解しようとした儒学者によって使用されたが、この時には士が武士のことと理解された。

(2) 尾張の人である人見奈が明和二年頃に著した書。「名古屋叢書文教編」所収。

(3) よく知られる朝倉無声の「見世物研究」(一九二八年春陽堂刊)は、見世物が中心で門付などの記述は少ないが、宮尾しげを・木村仙秀「江戸庶民街芸風俗誌」(一九七〇年展望社刊)や、東京堂刊の「随筆辞典(雑芸楽編)」(一九六〇年)など、すぐれた先人の研究も多い。

(4) 「堺市博物館蔵『日次風俗諸職図屏風』について」(「堺市博物館報」第一号所収)

(5) 元禄年間の制作といわれる。「屏風」とは違い、ある程度江戸の大道芸人の実態を知っている画家によって制作されたものと考えられる。

(6) 「日本庶民生活史料集成」巻二二や「京都叢書」第四に収録されるが、別に版本の復刻(石原書店刊「日次紀事」)も出る。

- (7) 「万歳の成立」(民俗芸能研究) 八号、のちに平凡社刊の拙著「翁の座―芸能民の中世―」に収録
- (8) 京都の時宗の僧四時堂其諺の著で、国書刊行会から活字本が出る。
- (9) 東京国立博物館蔵「月次風俗図屏風」にその姿が描かれる。
- (10) 為永一蝶が宝暦二二年に著した書で「歌舞伎叢書」「日本庶民文化史料集成」巻六に収録される。
- (11) 大坂に生まれ、三〇歳で江戸に下った喜多川守貞の著で「類従近世風俗誌」として明治四一年に名著刊行会から活字化され出版された(昭和五四年復刻)。
- (12) 別名を「自寛永至延宝はやり小うた」といい、延宝四年(一六七六)に刊行された歌謡集。「日本歌謡集成6」に翻刻される。
- (13) 文化年間(一八〇四―一八)に屋代弘賢が全国各地に質問状を出して民俗を問い合わせた調査の答書。「日本庶民生活史料集成」巻九に活字化される。
- (14) 明治時代末期に文部省が全国の民謡を調査した民謡集で、大正三年に刊行された。
- (15) 「藝能史研究」一三三号所収「操り浄瑠璃成立以前」など。
- (16) 如阜は江戸の人であるが、京・大坂にも居たことがある。「日本随筆大成」二期一〇巻に活字化し収録される。
- (17) 京都の呉服商に生まれ、長じては大坂に住んだ田宮仲宣の著で、「日本随筆大成」三期五巻に活字化される。
- (18) 著者不明。「日本随筆大成」二期五巻に収録される。
- (19) 作者不詳。「日本古典全集」三期ほかで刊行される。
- (20) 本来なら供の小法師が琵琶を背負っているはずであるが、それがない。この頃には平家を語らなくなっていたのであろうか。画家の描き忘れか。
- (21) たとえばサントリー美術館蔵「十二月月絵草紙」
- (22) たとえば三時知恩寺蔵の「十二月月都風俗絵巻」
- (23) 菊岡沾涼著で「近代世事談」とも称される。「日本随筆大成」二期六巻収録。
- (24) 喜多村信節は号を筠庭といった。「続燕石十種」2に収録される。
- (25) 浅井了意著の仮名草子で平凡社刊の東洋文庫に収録される。
- (26) 拙稿「フィリア美術館の芸能資料」(民俗芸能) 五七号所収)で一度紹介したことがある。
- (27) 紀州藩の国学者本居内遠の著で「日本庶民生活史料集成」巻一四に翻刻がある。なお内遠の生まれは名古屋。紀州藩に仕えて最晩年は江戸に住した。
- (28) 萩原龍夫著「巫女と仏教史」(一九八三年吉川弘文館刊)など。
- (29) 江戸の人である新見正朝の著で「八十翁嚙昔物語」とも呼ばれる。「近世風俗見聞集」に収録される。
- (30) 三時知恩寺蔵「十二月月都風俗絵巻」など。
- (31) 仮名草子。伊勢の人で江戸に住した医師磯田道治の作といわれ、「日本古典文学大系」(仮名草子集)に翻刻される。
- (32) 大坂に住した寺島良庵の著で、版本の復刻版が刊行されている。
- (33) 木崎惕窓の著。「福井県郷土叢書」に収録される。
- (34) 山田桂翁著。「近世風俗見聞集」所収。
- (35) 「近世の民衆と芸能」(一九八九年阿吽社刊)所収「猿まわし」の項。
- (36) 織田紘二「近世大道芸人資料」(「芸能」九巻八号―九号)など参照。
- (37) たとえば脇村家蔵「洛中洛外図屏風」の三条寺町の角に描かれる。
- (38) 拙稿「六斎念仏考―京都の六斎念仏を中心に―」(「京都民俗」創刊号)参照。
- (39) たとえば柳亭種彦が文政九年刊の「還魂紙料」(「日本随筆大成」一期六巻所収)で「正保頃の図巻」として紹介した絵など。
- (40) 「翁の座―芸能民の中世―」所収「ささら」とささら説経」(初出は一九八八年刊「京都部落史研究所紀要」八号)に詳しい論考がある。
- (41) 小寺玉晃著で文政元年から天保四年までの名古屋における見世物の

- 記録。『新燕石十種』に所載する。
- (42) 『民俗芸能研究』三号所収「三匹獅子舞の成立」参照。
- (43) 坂内直頼著の京都の年中行事記で『民間風俗年中行事』に収録される。
- (44) 『近世風俗図譜<sup>⑫</sup> 職人』(小学館刊)に図が載る。
- (45) 山城淀藩の武士渡辺善右衛門著で『日本庶民生活史料集成』巻八に収録される。
- (46) 原田某著。『未刊隨筆百種』一四に所載。